

## インフラツーリズムのこれから

太古の時代よりインフラは、その使命を果たすべく、人々の安全・安心な暮らしを支え続けてきた。そのインフラが、近年は観光資源として、周辺地域の活性化にも大きく貢献している。そうした取組みを国は、“インフラツーリズム”と称して強力にバックアップしている。

なぜこれほど、インフラツーリズムが拡大しつつあるのであろうか。その背景の一つには、東日本大震災以降頻発する自然災害が、人々のインフラへの関心を高めていることにある。加えて、ダムマニアをはじめとするいわゆるマニアの存在も忘れてはならない。彼らは、思い思いにインフラの魅力を見出し、広く情報発信している。さらに、観光ニーズの多様化により、インフラが観光対象の選択肢に加わるようになった。たとえばインフラのスケールの大きさや、あるいはテーマパークにはない現役施設としてのリアリティが、マニアにとどまらない幅広いファンを惹きつけているのであろう。それにしても、日常生活を支えるインフラが、観光という非日常の体験を提供するというのであるから少しややこしい。

では、こうしたインフラツーリズムは、はたして何をめざしているのであろうか？

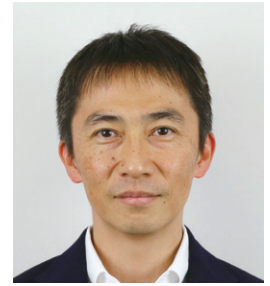
国の定義を借りれば、インフラツーリズムの直接の目的は、観光を手段として、来訪者に対して、インフラの役割や機能への理解を促進するとともに、回遊行動を促すことで、周辺地域の活性化に

貢献することということになる。この目的のもと、現在、全国各地でインフラツーリズムの様々な取組みが進められている。そして、その取組みの一端が、本誌の特集にも紹介されている。

話題は変わるが、筆者は都市史や土木史、景観を専門としている。そうした専門分野に身を置いているためであろうか、専門家ではない市民の方々を対象とした“まち歩きツアー”のガイドを依頼されることがある。東京のまちのあちこちで、まち歩きを実施するのであるが、いずれのまち歩きにおいても、参加された方々が、おそらく普段は特に意識することなく使っている道路や橋梁といったインフラについて、なぜ、どのような経緯でそこに建設されたのか、いかなる技術的特徴があるのか、だれが建設に携わったのか、そのインフラの建設により地域にどのような変化をもたらされたのかといった、インフラの特徴や来歴について解説している。いわば、まち歩き型のインフラツーリズムである。

ガイド役の筆者にとっては、自らの専門について話をしているわけで、ありていに言えば仕事の話をしているだけであるから、まち歩きを始めた当初は、はたしてそんな話が専門家ではない市民の方々の興味を引くのであろうかと、まったく自信がなかった。しかし、ふたを開けてみれば、参加者の皆さんは実に熱心にガイドの話に耳を傾けてくださる。まち歩き終了後に、参加者の皆さん

日本大学 理工学部 まちづくり工学科 教授 あ べ たか ひろ 阿部 貴弘



に感想をうかがうと、「インフラへの理解が深まった。」という感想とともに、「普段見慣れた風景がいままでとは違った風景として浮かび上がってきた。」「いままで気付いていなかった地元の魅力に気付いた。」「同じコースをまた歩いてみたいと思った。」「散歩が楽しくなった。」といった感想が寄せられた。インフラの見方を変えることで、日常生活が少し豊かなものになった…というのは、大げさに過ぎるであろうか。

実は、こうした感想の中にこそ、インフラツーリズムの本質があるのではないかと思う。つまり、単なる“スケールが大きい”“見たことがない”“入ったことがない”といった非日常の体験はもとより、蛇口をひねれば水が出るといった、安全、安心、快適な日常の暮らしが、いかにして保たれているのかを知りたいという知的欲求が、インフラツーリズムのブームの根底にあるのではないか。

さて、現在、黎明期にあるインフラツーリズムでは、各地で様々な取組みが試行錯誤されている。来訪者を集め、もてなすため、工夫を凝らしたイベントやキャンペーンなどのコンテンツも充実しつつある。そうしたコンテンツももちろん大切ではあるが、インフラツーリズムの魅力はやはり、現役施設としてのリアリティにある。過剰な観光演出に傾倒することなく、ありのままの姿で勝負する姿勢も忘れてほしくない。なにより、インフラツーリズムは、施設管理者にとっても、自らの

仕事を見つめ直す良い機会である。一人の技術者として、胸を張って、誇りをもって、インフラのすばらしさを語ってほしい。

また、これまでのところインフラツーリズムの対象は、比較的規模の大きい、いわば一級品のインフラが中心である。しかし、いずれインフラツーリズムの取組みが成熟していけば、より小規模な、どこにでもありそうな身近なインフラも、観光対象として扱われるようになるかもしれない。それをインフラツーリズムと呼ぶかどうかは議論がありそうだが、いずれにせよ、インフラツーリズムのすそ野の広がりや、コンテンツの多様化に期待したい。

COVID-19の影響で、これまでに比べ、自宅やその周辺で過ごす時間が増加した人も少なくないであろう。自宅周辺を散歩する機会もずいぶんと増えたのではないか。その際、身の周りのインフラにも気を配ってみてほしい。少し見方を変えるだけで、見慣れた風景が違って見えてくる“非日常”を体験できるかもしれない。感染拡大防止のため、少々窮屈な“新しい日常”の実践が求められているいまこそ、身近なインフラツーリズムを実践してみたいかがだろうか。日常をより豊かなものにするために。